(2) 研　究　会

昭和58年度より従来からのやや規模の大きな「研究会」と小規模の「ミニ研究会」の二本立てで実施し，後者は発足したばかりの「計画研究」に対応したものと位置づけられた。昭和58年度に採択された研究会は以下のとおりである。

A．研究会

1. ニホンザル野外観察施設における研究の現状と課題
2. 霊長類研究への実験動物学的アプローチ
   I．霊長類と疾病
3. 霊長類の性と生殖の中枢機序
4. 第13回ホミニゼーション研究会

B．ミニ研究会

1. ニホンザルを主とした霊長類の初期発達過程
2. 霊長類二足性の生物力学的分析
3. 霊長類臼歯の機能の基礎となる形態をめぐって
4. 血液タンパク質を分子指標とした霊長類の系統と進化

2. 研究成果

A．計画研究

課　題　1

サルの耕地回避学習の社会学的研究

乗越皓司・吉場都子・原久美子（上智大・理工）

本研究は，強煙火システム作動時の群れの反応を，特にリーダーと他個体との機能的関係を重視しつつ観察し，耕地回避が社会的学習として成立する機構を明らかにすることにある。

木曽研究林のS群とK群を研究対象に選び，人づけ，個体識別等の予備研究が3～5月に3回，計28日間行われた。

7月上旬に設置された強煙化システムの作動は，農作物が実る11月までの間に，以前に比べて激減している耕地接近の際ほぼ正常に働いており，S群およびK群とも，耕地回避のはっきりした学習効果が認められていた。しかし，耕地回避学習が早くから進んでいたK群においては，強煙火爆発に対して，以前より遠くまで群れが回避することが少なく，一種の慣れが起こりつつあることがうかがわれた。煙火爆発後の群れ逃走の際，リーダーらしき成体の木ゆすりや警戒の音声にかかわらず，群れ全体が近くに留まっている事例がみられ，これは，群れレベルで学習される行動とそれを除去する個体との対立の現われかもしれない興味深い例であり，今後さらに分析する必要がある。

岡山県大佐町における自然開発事業の進行とそれに伴う野生ニホンザルの分布および遊動域の変化

小山高正（お茶の水女子大・家政），安藤明人（美作女子大），渡辺義雄（阪大・人間科学）

昨年度の調査で，大佐町及びその周辺には野性ニホンザルの群れが6群いることが明らかになった。そして，同町における開発事業の進行に伴い，サルによる農作物の被害が増加していることも示唆されていた。本年度の聞き込み調査では，新見市阿哲郡の地方振興局で，ニホンザルについて，大佐町に4群300頭，哲多町に3群60頭，神郷町に3群150頭がいると推定しており，57年度には有害鳥獣として30頭が捕獲されていた。

本年度は調査の範囲を大佐町上刑部地区に絞り，ニホンザルの群れの分布と住民のサルに対する意識の調査をアンケートによって行った。上刑部地区で，6日間サルの群れを観察でき，特に5月2日から5日の期間には複数の群れを同時に観察できた。その結果，この地区には，つづら畑群，赤松群，定藤群の計3群のいることが確認できた。次に，アンケートによる調査では，サルの害がみられた地域に55通の質問紙を配り，46通の回答が得られた。最初にサルを見た年と場所，最初にサルの害をうけた年と場所を答えてもらった結果から，サルと住民との接触はだんだん増えており，その範囲も広がっていることがわかった。また，被害の例は昭和30年代から急増している。開発に対する考え方とサルに対する意識については，全体的に開発優先でサルを根絶するという意見が強い。すなわち，当地区では，ほとんどの人は開発をすればサルの害が増えるのはわかっているが，とにかく開発を進めてほしいと考えており，開発